

2008年度「居住環境デザイン演習」第二課題

2008・08・09

出題：衣袋・山寄

講評：小西弘樹 (93年卒)
七田裕 (94年卒)
霜鳥聡志 (99年卒)
牛込具之 (01年卒)
牛込真佑美 (01年卒)
田村翔 (06年卒)
長谷川徹 (06年卒)

TA：長門・吉田

1. 基本方針

「可能性」「創造性」の探索が行われる「グループワーク（協同，協調作業）」を、Web上によるブレインライティング等のツールを使用しながら設計の初期段階で行い、その後個人作業に移行する。グループワークと個人作業の併用によって、設計を進める。

2. 課題

・テーマ：「私のつくる街の診断書～タウンカルテ～」

- ・ 主旨：我々の身の回りには、環境問題、少子化、高齢化など、様々な社会問題がある。それらは、大都市には大都市特有の、地方には地方特有の色を持つ。今回対象敷地としている、あなた方の生活する身近な街、東大宮にも、その地が抱え続けている問題、もしくは、あなたが生活している上で感じる問題があるはずである。

この授業ではまず始めに街の問題点を発見し、『診断書となる解決策』をグループで作成する。それを元に個人が、公共施設の設計を開始する。診断書によって目先の回復を目指すのはもちろんのことであるが、最終的には時間がかかっても街の自らの治癒力によって再生させ、自立を促すことが望ましい。そのような処置法の一つとして『文化を構築する建築(※1)』を提案するというのが今、求められているのではないだろうか？

(※1) なぜ、今、文化を構築する建築なのか？

街や都市に新たな文化を築き上げるには時間がかかるかも知れない。

しかし、その時間に寄り添って一緒に生きていくのが建築の本来あるべき姿で

はないか？

経済合理主義のもと、無駄なものをすべて排除することで人々の心が病んでいる現在の日本。そんな都市には芸術(※2)などによって生み出される新しい文化こそが潤いを与えるのではないか？

今年度の第二課題では 公共施設に対して『文化を構築する建築』というヒントを与えよう。

ここで文化の構築を願うのは、長いスパンで建築を考えて欲しいからだ。その悠久に流れる時間の前には、一時の建築のスタイルなど無力だ。

建築は使い捨てではない。

私たちの仲間には竣工(建物が完成すること)がこの仕事のゴールという人もいる。しかし、使う人たちには、そこからが始まりだ。私たちの仕事は未来にまで責任を持たなければならない。

どんな文化がこの街にふさわしく、この国には求められているのか。それを手助けするためにはどんな建築施設があるだろう。そんな文化を構築する建築を考えて欲しい。

※2 例えば、文化を構築する施設というだけで、芸術→美術館と安易に思い浮かべないで欲しい。現在の日本人の心を潤すもの。そんな文化を生み出すものは何か？それを**診断書**作成時に深く考えることがこのプロジェクトを成功に導く鍵へとなるだろう。

- ・設計対象： 東大宮中央公園
- ・法規：別添の敷地資料を参照
- ・敷地：別添の敷地資料を参照
- ・中間提出物：グループで2週間、以下の項目について考え、『診断書』をグラフィカルに表現。
 1. 対象者（誰がこの施設を使うのか？）
 2. 敷地（敷地、その周辺にはどのような特徴があるか？）
 3. 問題点（この街にはどのような問題点があるのか？）
 4. コンセプト（どのようなテーマを設定するか？解決方法。）
 5. 施設機能（どのような建築を計画するか？解決するか？）
 6. 将来像（この計画によってどのような変化が街に現れるのか？）
- ・最終提出物：計画設計過程を必ず記述すること。及び、周辺環境に対する考え方を含めグラフィックに表現する)
 - ：全体配置図（建物は屋根伏せで表現し、周辺環境、外構計画を含めて表現）
 - ：平面図（1階平面図は配置図をかねる） 縮尺自由

: 立面図	縮尺自由
: 断面図	縮尺自由
: 外観透視図	着色
: 内観透視図（主要内部空間）	着色
: その他各自が表現したい図面	

- ・用紙：A1（紙質、枚数は自由、密度の濃いものとする）
- ・その他：寸法の入れ方は主要なものだけとする
- ：表現および仕上げは各自で工夫し自由とする

3. スケジュール

6月07日（土）ガイダンス グループ分け

6月12日（木）総合ミーティング（コンセプト、敷地分析）

6月19日（木）総合ミーティング 中間提出

6月26日（木）総合ミーティング 空間、形態のエスキス

7月03日（木）総合ミーティング 空間、形態のエスキス

7月10日（木）総合ミーティング 空間、形態のエスキス

7月17日（木）総合ミーティング 空間、形態のエスキス

7月24日（木）総合ミーティング 空間、形態のエスキス

7月28日～ 8月2日 期末試験期間中（システム工学部）はコーチ個人によるエスキス

8月7日（木）提出（～16:00）

8月9日（土）講評会（14:00～）

補講期間 7月23日（月）～ 7月25日（金）

テスト期間（システム工学部）7月28日（月）～ 8月2日（土）（工学部）7月31日（木）～ 8月7日（木）

夏季休業（システム工学部）8月4日（月）～（工学部）8月8日（金）～

※総合ミーティングの「空間、形態のエスキス」とは3次元 OBJECTCAD でシミュレーションをした後、各階平面図（一階平面図は周辺の環境も記入すること）、断面図、立面図、パースを一枚にレイアウトしたものをエスキスの対象として行います。また必ず3DPDFデータも掲載すること。

講評会

8月9日(土) 午後1時から、情報処理演習室で居住環境デザイン演習第課題講評会をおこないました。講評内容は各学生の作品タイトルをクリックすることで閲覧できます。

A 班

アンダーグラウンド人たちのためのベッドタウン

r06010 榎本俊輔 「SNS house @ higashioomiya.com」

r06026 喜多村佳典 「Watching,Playing,Under ground!!」

r06038 小谷野舞香 「Alice」

j06021 大塚駿亮 「under the water」

B 班

学生から始まるコミュニティ

r06052 竹下悦子 「学生の村」

r06087 吉田新 「SOUND ESCAPE」

j06041 久木野陽一 「学の迷路」

k06019 大野剛 「A SATELITE CLUBHOUSE ～躍動する大地～」

C 班

エコするまち東大宮

r06044 鈴木英明 「まちの居間」

j06100 宮地洋 「クチコミのコンビニ」

k06015 上野翔 「green palette」

k06023 大倉健 「モノアクティビティ」

D 班

跡

r06012 大川郷 「hakutei」

r06017 大貫結衣 「こえがつくるまち」

r06051 竹内慶太郎 「凹凸を行きかう日常、非日常」

r06063 中島彩 「虫食い縁側」

j06074 成富康朗 「裸足のコミュニティ」

■総評

山寄先生：

今年度の学年が面白いというコメントで私が言いたかったのは、誤解しないで欲しいのですが、発想はあるのだけれど、その先が無かったということです。他の誰もが考えないようなアイデアをひらめく能力は大事ですが、それを他人と共有できるようなアイデアにまで落としこめるだけの技術力、知識(この授業で言うところの建築化するというプロセス)などがないと、単なるヒラメキ止りです。

自由な発想というのは枠にとらわれていないから出てくるということだと思います。建築を(建築の知識がないために)建築の枠の外から考えられるということ。しかしそれは建築的知識がないということでもあります。その既成概念が無いから、自由に考えれるのですが、逆にその知識がないために、その先の建築化へのステップで躓いてしまう。自由でいいのか？頭でっかちになってしまうのか？とバランスの問題なのですが、自由な発想と同時に、それを定着させるための技術をこの授業で獲得するのを目指していました。

しかし、振り返ってみても、やはり、面白いヒラメキを建築に変換できたかといわれると、まだまだ足りなかったと思います。「粘り強く考える」ということが出来ていたか？ヒラメキが時間の経過とともに、色あせて見えてしまっ、逃げるように出てきた新しいヒラメキに飛びつき、頭の中が混乱してしまったとか、最終的に提出する図面の見栄えを考えてプレゼンに走ってしまったようなことは無いか？ 「もっとよくなるはずだ！ 他の側面からこのアイデアを見ることは出来ないか？」と静かに独りで考える時間が大切なんです。これは理論とか理屈とかではない。建築家の本を読んだとしても答えはない。あったとしても、それを読んだだけで私たち自身の力になるかは怪しい。

いいデザインを作りたいのならば、とにかく作ることではしか答えは見つけれられない。自分の頭で考えて、ひたすら手を動かす。その繰り返しでしか、良いものはつukれない。後期には、たくさんのコンペがあるから自分でどんどん挑戦するべきだし、その手助けとして「設計腕試し」が今年も開催されるます。もちろん私も見ます。単位が出ないけれど、そういった場所で自分のモチベーションを高めてやるということが大事。夏休みの自己分析や、作品作り直しなども同じこと。誰も見ないけれど、独りでもそれを続けられるか？そういうことを繰り返していくことで本当の設計をする力が付いていくのだと思います。以上です。ちょっと長くなりましたが、お疲れ様でした。

衣袋先生：

身近に接することと、ネット上でのコンタクトでは学生に対する見方は違う。環境の学生は「環境（どう定義するかによって異なる）から建築といったように、学ぶ範囲が広く自分の学ぶ領域を決めていない。無責任に環境を広げ過ぎている傾向がある。さらに、意識的に、強制的にも他分野と絡めて教育する必要がある。ここ数年、深川君の「環境共生建築・住宅」の特別講義を行っているが、環境システム学科の教員は誰も参加していない。環境共生という以上、見学的でもよいから参加すべきではないでしょうか。一方、環境システム学科は新たな分野に取り組み、新たなビジネスモデルが生まれると言っており、学生にあれもできるこれもできると広げ過ぎている。

褒めることは簡単。良い発想があってもそれを案にできないのは勉強が足りないから。形ができないのは勉強してないからだ、と酷評すべきである。学生は、教員からというよりも、学生同士の会話、行動から刺激しながら成長している。環境は範囲が広い割には有効範囲が狭いのが現状。

夏休みの宿題として、今日の講評会で言われたことに関して直してほしい。直すことが大切。第 1 課題の個人設計「住宅」も直していないだろう。酷評されると直そうとする。ほめればそこで終わってしまう。意地があれば1週間で案が変わってくる。これについてこれなければどんな社会でもやっていけないだろう。

第 2 課題に関しては、抽象的なコンセプト等も大事だが、具体的なものを中心に建築プログラム、地域プログラムを考えてほしかった。こんな児童館でいいの？こんな美術館でいいの？東大宮で。ということを考えてほしかった。もっと「現実」「現状」に疑問を持つてほしい。「住宅」とはこれでいいのだろうかなど。第 2 課題に関しては、抽象的すぎ、失敗したと思っている。建築プログラムから考えても、現実の建築の機能、モノとしての建築を支える具体的なもの、例えば、トイレ、維持管理、倉庫等、具体的なものがない提案が多かった。そういったことで現実の社会で立っているもので疑問をもってほしい。OB,OG は来年もまた参加してください。その時は酷評をしてください。学生は今回で得た何らかのことを修正してください。カット&ペースト、さらに修正が容易なことがデジタルのいいところです。「建築設計腕試し」をやりたい人はメールください。3年の後期なので自分の方向を見定めてください。自分が生きていくための糧・方法を確立してほしいと思います。

